

9月8日(金) シンポジウム1 第5室(2114)

分野/Field: Testing, Evaluation

英語習得の熟達度測定指標開発についての考察

—日本人の英語能力を知るために—

An examination of the development of measurement index in L2 English proficiency

— We want to know to what extent the learners have acquired English —

提案者1 若林茂則(中央大学)

提案者2 村野井仁(東北学院大学)

司会者・提案者3 白畑知彦(静岡大学)

◆シンポジウムの目的

本シンポジウムの目的は、日本の学校現場で英語を学習する日本語母語話者(便宜上「日本人」と表記する場合あり)の、英語熟達度を客観的に評価するテストを開発するための方法論を検討することにある。

日本では中学校から英語を教科として学習するが、学習者がどの程度のレベル(熟達度)にいるのか、客観的に把握する評価方法が今のところない。英語検定試験(英検)などのレベル別テストはある。しかし、例えば英検3級を取得するとそれは「中学校卒業程度の英語レベル」と言われたりするが、このような指標はきわめて曖昧で、「中学校卒業程度」とはいかなる英語能力を指すのであろうか、明確ではない。「日常会話に困らない」といった漠然とした表現ではなく、もっと具体的にその熟達度を指し示す指標の提示が求められよう。また、英検やTOEICなどは、そのテストを受けた学習者のみの結果を基にしているだけであり、当然、受験していない他の学習者の熟達度は分からない。日本全体の中学3年生の本当の英語熟達度を把握するためには、「全頭検査」を実施するか、「ランダム・サンプリング」で調査を行う必要性が生じてくる(根岸雅史氏からの私信)。

また、別の観点から次のようなことも言えるであろう。すなわち、日本語を母語とする英語学習者の英語習得過程には、他言語を母語とした学習者と類似した習得過程を示す部分と、学習者の母語の影響が顕著に現れる部分があることが、これまでの言語習得研究で指摘されてきている。文法形態素、疑問文の語順、否定文の語順などについては、多くの入門書が普遍的な発達順序の存在を示唆する研究を紹介している。これらの実験データが真実に近いものであるならば、少なくとも文法の習得においては、こういった先行研究結果が学習者の言語発達の指標作成に役立つ可能性があるだろう。このような観点からの議論もしていきたい。

上述した内容を基に、本シンポジウムでは、どのような言語調査を実施すれば、日本人の英語熟達度を適切に調査し把握できる指標となり得るか、その可能性を探っていく。以下に、発表者3人の要旨を順に載せる。

◆若林(提案者1)の発表要旨:

文法形態素の習得・使用と、wh疑問文の習得・使用について、高校生ならびに大学生から集めたデータを示しながら、従来の研究では明らかにされなかった日本語の影響な

どを明らかにする。特に、口頭和文英訳を含む産出と読解における文のオンライン処理という点から第二言語発達について考える。

◆村野井(提案者2)の発表要旨:

文法の発達段階から見た英語熟達度について考察する。第二言語の文法習得において一定の発達段階が見られることが近年の第二言語習得研究によって明らかにされてきている。これらの発達段階を日本人英語学習者の英語熟達度の指標として利用することが可能かどうかを本発表では検討したい。

発達段階についての研究がある程度蓄積されている文法項目(テンス・アスペクトおよび疑問文構造)に焦点を絞り、まず、これらの文法項目の使用を段階ごとに引き出す誘出テスト(elicitation test)の提案を行う。テンス・アスペクトに関してはBasic Varietyに関する研究およびアスペクト仮説を主な枠組みとして第二言語発達段階の特定を試みる。疑問文構造の発達段階特定については処理可能性理論の応用を試みる。提案された誘出テストの予備実験を、日本人大学生を被験者として実施する。そのデータを用いて、本テストで測定された文法熟達度と総合的英語熟達度を測るテストとの相関を調べ、文法の発達段階から日本人英語学習者の英語熟達度を見ることの可能性および問題点を検討する。

◆白畑(提案者3)の発表要旨

白畑が現在開発している英語熟達度テストについて紹介する。白畑は、日本の中学生から大学生・社会人までを対象に実施可能な統一的英語テスト問題の開発を試みている。その予備的段階として、2006年3月に、中学校3年生を対象者とし、比較的大規模に熟達度テストを実施した。文法、語彙、4技能を個別にテストした。すなわち、どの文法項目がどの程度理解されていると、どの程度4技能が身についているか、その相関関係を明らかにすることがテスト開発の目的である。本シンポジウムではその実験手法を中心に説明し、その妥当性についてフロアからご意見を頂戴したい。

◆シンポジウムの進め方

シンポジウムの流れは、概略次のように計画している。

①全体的説明(司会者)4分 → ②提案者1の発表17分 → ③提案者2の発表17分 → ④提案者3の発表17分 → ⑤提案者間での議論10分 → ⑥フロアを交えた議論22分 → ⑦まとめ(司会者)3分

(本研究は、平成17年度科研費基盤研究(A)(1)「第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究」(研究代表者・小池生夫)の補助を受けたものである。)